

現代社会を見つめて 13

石美 真也

『故事成語でわかる経済学のキーワード』 梶井厚志 著 (中央公論新社) iii, 288p. 18cm

経済学的な用語や考え方を学ぶときに、故事成語になぞらえて考えたということはあまりないでしょう。比較的新しい学問である経済学と、昔にあった事柄に基づいた言葉である故事成語を結び付けることには少し無理があるように思われます。しかし、経済学の理論には、昔からの考え方にも通じるものがあります。それはどのようなものでしょうか。

本書では、経済学の専門用語が故事成語を用いて解説されています。「 sunk・コスト(埋没費用) 」と「覆水盆に返らず」、「第三者効果」と「勿類の交わり」など、経済学的な考え方が故事成語の意味やその言葉の背景に関連づけられて、わかりやすく説明されています。取っ付きにくい経済用語も趣向を変えて考えてみると、理解しやすくなるかもしれません。

331-Kaj

『黒字亡国』 三國陽夫 著 (文藝春秋) 242p. 18cm

日本が貿易立国であり、貿易黒字が多いことはよく知られていることと思います。黒字が多いことは日本経済にとって悪いことではないように思われますが、果たしてそうなのでしょう。この黒字は日本経済にどのような影響を及ぼしているのでしょうか。

本書では、日本の対米貿易黒字が日本経済を崩壊させることに繋がると論じられています。その構図は日本経済が貿易で得た黒字は、それに見合う富という形でアメリカに吸い上げられており、黒字を増やすほど日本の経済成長を妨げ、アメリカの経済成長を助長するというものです。そして、日本が経済成長をするためには、日本が内需拡大をはかるための政策を取らなければならないとされています。経済における日本とアメリカの関係はどのようにあるべきか考えてみましょう。

332.107-Mik

『本田宗一郎と井深大』 板谷敏弘, 益田茂 著 (朝日新聞社) 217p. 15cm

ホンダとソニー、現代の日本においてこの二つの企業を知らないという人はまずいないでしょう。どちらも戦後日本を代表するメーカーです。現在のホンダとソニーの会社規模は大変大きなものですが、その始まりは小さなものでした。二つの企業が現在に至るまで成長する過程はどのようなものだったのでしょうか。

本書では、ホンダの創業者である本田宗一郎と、ソニーの創業者である井深大が歩んできた軌跡が、二人に共通するキーワードを見いだして記されています。会社の創業に至るまでの経緯や、新製品の開発までに直面した困難など、二人の挑戦してきたことがよくわかります。二人が活躍した時代とは状況が異なる現代ですが、「ものづくり」をすることがいかなるものか考えてみませんか。

289.1-Ita



いしみ しんや (キャリアサポートセンター)